

食べないBさんとの6年間

～認知症による食ムラがある方への
アプローチ～

特別養護老人ホーム 丸子の里
佐藤容子・鈴木千晴



特別養護老人ホーム 丸子の里
平成元年 7月 法人認可
平成2年 9月 特別養護老人ホーム丸子の里
創設（長期50名・ショート9名）
平成5年 4月 増床（長期80名・ショート20名）

特別養護老人ホーム わかば
平成18年 2月1日 定員20名で開設。
閑静な住宅地の中にある、丸子の里
サテライト型の地域密着型の特別養護老人ホーム。



利用者B様の特徴

- ・女性 70代前半（入居当時） 介護度5
認知症自立生活度Ⅲa
- ・身体状況 左上腕 両下肢 体幹麻痺
- ・病歴 高血圧・神経因性膀胱炎・逆流性食道炎
右尿管結石・くも膜下出血（左下肢麻痺）
- ・性格 こだわりが強い・嗜好に偏りがあり「嫌いで
す。美味しくありません。」といった強い口
調でいわれる。

摂取状況

- ・摂取方法 介助にて摂取（一時期、好きな
物のみ自力摂取された事あり）
- ・摂取状況 ①嗜好や気分によって摂取量
0～10割とムラあり。
②関わる人をかなり厳しく選別
する。
③嚥下機能に問題なく、ムセ等
みられず。

<具体的な問題点>

- ①食事の摂取量がかなり低く、菓子パン・
お菓子等好きなものしか食べてない時がある。
- ②気分により、摂取量の差がある。上手に会話を
すると摂取量上がる事は判ってきたが、
会話が上手に続かない。
- ③人への好き嫌いが激しく、介助に入れない職員が
いる事もある。強い口調で相手を攻撃する。

<具体的な取り組みについて>

- ①食事
まずは、栄養が偏っても、ご本人に「美味しい」と
いって頂ける物を提供しては・・・？
- ②会話の工夫
B様との会話は職員間で共有し、ご本人が好む会話の
内容を熟知していく。
- ③本人が落ち着いて食べる事が出来る場所を検討。

嚥下機能を保つ為、経口摂取を続けていきたい。

①食事を勧める。



②摂取が進まなかったら、嗜好に合ったお菓子類を織り交ぜて提供。



③パンやおニギリを提供。と模索しながら本人に喜ばれる食事変更を行っていく。

その結果！！



食事の時に、「今日の食事は美味しいです。」との言葉が聞けた！！！！

初めてポジティブな食事への感想が！

摂取良好だった為、「自分で食べてみては如何でしょう？」とスプーンも持って頂くと・・・。

↓
自力摂取に成功！ 7割召し上がる。

その後も食ムラは続き、お菓子類と食事の交互での提供は続くも・・・

↓
初めての自力摂取日から10日後には、主食10割・副食6割と摂取される日！！

(その後も、素麺・焼きそば・さつま芋類の献立の時等、自力で完食されるメニューが増えてきた。)

家族の協力 食事編

①ご本人が喜びそうな嗜好品の持参。

(旬の生フルーツ・夏場はアイス・菓子パン・寿司・その他お菓子)

②旦那様が食事介助を行うと、職員よりも比較的摂取が進み易い。

③ドライブ・外食に連れて行って頂く(外食先でお酒を楽しまれる。)



入居して約3ヶ月後に旦那様から「よく食べるようになったなあ」との言葉を頂ける。

言葉の言い換え

外国がお好みのB様に対する声掛けの事例・・・

- ・白菜コンソメ煮・パンの組み合わせ時 → 「今日の朝食はバテですよ。」
- ・野菜のサラダ → 野菜のドレッシング掛け
- ・酢の物 → 野菜のマリネ
- ・ヨーグルト → ババロア
- ・飲料水 → 富士での組み立てのミネラルウォーター
- ・コヒー牛乳 → 北海道の特別な牛乳を使用しています。
- ・チョコアイス → ベルギー産のチョコを使用

行事食を楽しもう。

お一人での食事を好まれるB様は、居室でのお食事が大半であるが・・・



行事時には離床を勧め、時には外でもお食事をして頂く



気分が高揚し、お食事を楽しんでくださる。

▶ 行事の種類

バーベキュー・寿司バイキング・クリスマス会等



B様の世界に入り込んで会話をする様に心がける

▶B様の生活歴からヒントを得て、会話を行っていく

- ・今日はもういらない。食べたくない。と言われたら・・・？？？
- ↓
- ・先ずは相手の気持ちに同意する。「そうだよね、もう食べたくないよね。」
- ↓
- ・その上で再度柔らかく勧めてみる。
「Bさんが『甘い物が好き』って話を聞いてもので、この南瓜がBさんに特別作ったの、味見だけでも如何でしょうか？」
- ↓
- ・相手の人格・意見を先ずは受け入れ、同調する。
その上で、いかに相手に食事を口にして欲しいかを伝え、無理じいはせずにお願いをする。

<取り組みの結果>

- ・在宅時は嗜好品ばかりの食生活であったが、当施設に入居後は、嗜好品以外の食事を摂れるようになった。
- ・入居後の6年間の間、水分摂取量の不足により尿路感染等に罹患する事があったが、入院する事なく、施設内で暮らしていくことができた。
- ・本人の気分が良くなるような会話のコツを共有する事によって、食事介助が出来る職員が増えた。

<取り組みの結果>

- ・入所1カ月で摂取量・BMIが増加している。
- ・H23.9～摂取量低下により点滴施行。その後、全体的な摂取量は低下。H27.4～点滴中止により、摂取量が緩やかに増加傾向。
- ↓
- 点滴を中止した事により、口渇・空腹感を感じている為だと思われる。
- ・主食は、本人が好きな「寿司・パン」を食事として提供している事もあり、副食に比べると摂取量が良い時もある。

<取り組みのまとめ>

- ◎今回Bさんについて話し合う機会が増え、職員間で新たな情報交換が出来た。
- ◎拒否の言葉が出ても諦める事なく、皆で工夫を行い、再チャレンジをしようという**職員の意識改革に繋がった。**

<今後の課題点>

- ◎新しい介護職員は会話のコツをつかむ事が難しい。
- ◎身元保証人である夫が認知症により、今まで通りの支援が難しくなってきた。
- ◎Bさんが体調を崩し易い夏に向け、脱水を予防したい。その為の水分補給の方法。

ご清聴ありがとうございました。

